

日本人と韓国人のあいづち比較

——あいづちの頻度、タイミング、機能について——

崔 ハ ナ

1. はじめに

あいづちは話し手の発話に対する聞き手の反応であり、日本人のコミュニケーションにおいては特に頻繁に行われると言われている（水谷1983）。日本人において、円滑なコミュニケーションが成立するためには話し手の役割とともに、聞き手の役割も大きく、聞き手は小まめにあいづちを打つことで、話の進行を助け、話し手と共に会話を作り上げるという役割を果たしている（水谷1983、堀口1988）。

しかし、日本語学習者においては、このような日本人のコミュニケーションにおけるあいづちが日本人との会話の障害となることも多い。韓国からの留学生である筆者はアルバイト先の友だちからよく“反応薄いな”“あ、聞いてない”などと言われたことがあり、この原因は日本人と韓国人のあいづちの違いではないかと考えた。本稿では、両言語におけるあいづちの実態を調査し、日本人と韓国人のあいづちに相違はあるか、どういうところが相違しているかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

これまでの日本人のあいづちの機能に関する研究では、「聞いていることを示す」「理解していることを示す」といった機能はほとんどの研究で一致しており（堀口1998、松田1988、メイナード1993）、その他に「同意・否定を示す」「感情を示す」（堀口1998）、「間をもたせる」（松田1988）などの機能があげられる。一方、韓国人のあいづちの機能について、生越（1988）は「聞いていること、話の内容が分かったことを示す」形式、「話の続きを促す」形式、「相手の話に驚く」形式、「興味を持っていることを示す」形式があると論じており、その中「話の続きを促す」形式が「聞いていること、話の内容が分かったことを示す」形式と同種であるとしている。

韓国人の「聞いていること、話の内容が分かったことを示す」「話の続きを促す」という機能は日本人の「聞いている」機能に相当⁽¹⁾し、「相手の話に驚く」は「感情を示す」に相当すると考えられる。このように韓国人のあいづちは日本人のあいづちに類似しているにも関わらず、筆者が感じたあいづちの違いはどのようなものであるのだろうか。

今回の調査では両言語のあいづちの機能のみならず、頻度やそのタイミングなどにおいて

も考察を行い、両言語のコミュニケーションにおけるあいづちの相違点、類似点を明らかにしたい。

3. 調査方法と分析方法

3. 1 データ収集方法

本稿では、日本人と韓国人のコミュニケーションにおけるあいづちの実態を比較するため、日本人同士と韓国人同士による実際のコミュニケーション場面を以下のように収録、文字おこしを行い、分析した。

今回収集したデータの対象は日本人同士と韓国人同士の各3組である。一組は各3人で会話を⁽ⁱⁱⁱ⁾、より自然な会話を引き出すために、親しい間ではないが、ある程度面識があり、何回か会話を交わしたことがある人たちを一組にして、データを収録した。被験者は筆者と交友関係にある人に依頼し、協力者を探してもらい、実施した。また、男女における言語使用の違い^(iv)や年齢における言語使用の違いを考え、性別は女性に限り、年齢は20代に限った。「女性に必要なもの」というテーマで会話をはじめ、各10分間話をしてもらい、また、こでもより自然な会話を引き出すため、流れによる話題の変化を認めることにした。あいづちの調査であるということは伝えなかった。

文字おこしに際しては今回の調査では以下のような記号を使い、あいづちを表記した。たとえば、[✓(注意)]は「注意」機能のあいづちを意味する。また、縦軸が時間の流れを意味する。

表1 調査対象者について

対象	日本人同士 韓国人同士
年齢、性別	20代、女性
組	各3組（一組 3人）
時間	各10分
話題	女性に必要なもの （ただし、流れによる自然な 話題の変化を認める）

表2 あいづち表記記号

✓	あいづちの表記
()	あいづちの機能
N1～N9	日本人会話参加者
K1～K9	韓国人会話参加者

3. 2 分析方法

あいづちの定義は研究者によって様々であるが、本稿では、メイナード（1993）、堀口（1997）、金珍娥（2004）を参考にし、次のようにあいづちを定義した。

〈あいづちとして分析する対象〉

- ①「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現で、実質的な内容を含まない表現」として定義する。

- ②「マジ?」「本当に?」のような疑いなどの感情表出の発話やそれらの上昇イントネーションの発話でも、上記の定義に当てはまるものはあいづちとして捉える。しかし、質問に応じた「うん」などの返答はあいづちとして捉えない
- ③「繰り返し」や「言い換え」の場合も、①の定義に当てはまるものはあいづちとして捉える。
- ④笑いを含む言語行動によるあいづちを研究対象とし、うなずきなどの非言語行動によるあいづちは除外する^(iv)。

あいづちの機能に対しては、メイナード (1993)、堀口 (1997)、村田 (2000)、姜 (2001) を参考にし、次のように分類した。

表3 あいづち機能の分類

「知らせ」	「注意」	単に聞いていることを話し手に伝える。
	「理解」	理解していることを話し手に伝える。
「態度」	「同意・共感」	理解し、さらにそれに対して、同意・共感を示す。
	「感情表出」	理解し、さらにそれに対して感じた驚き、喜び、悲しみ、怒り、疑い、同情、いたわり、謙遜などの感情を示す。
	「間つなぎ」	話が断絶された時に、間をつなぐ

上記機能のあいづち形式をまとめると以下ようになる。

表4 各機能の形式

「注意」	反復や伸ばして言うことのない短い「うん」
「理解」	反復して言う「うんうん」、伸ばしていう「あー、(なるほど)(そっか)」など
「同意共感」	主として「そう」形で、「そうだね」、また、反復していう「そうそう」「うんうんうんうん」など
「感情表出」	いわゆる感情を表す言葉「本当に?」「マジで?」「きゃー」「ウソ!」また、色々な感情を表す「笑い」など
「間つなぎ」	話が断絶される前の話題のポイントとなる言葉

各機能への分類は基本的に形の上の違いで分類を行った。ただし、各機能への分類は常にははっきりと区別できるものではなく、それぞれ重複して2つ以上の機能を持つと思われるものもある。その場合は、会話の流れの中でどのような機能に重点が置かれているかを前後の文脈から考え、五つのうち主となる機能へ分類した。

特に反復の「うんうん」などは、「理解」と「同意・共感」との区別が非常に難しいものであったが、今回は前後の文脈が「同意共感」ができるような話であるかどうかによって判断を行った。

例) 「理解」のあいづち

N 1	N 2	N 3
✓ (注意) うん		しかも、1 個はなんか工事しはじめて、
✓ (理解) うんうんうん		コンビニの予定だったの

例) 「同意共感」のあいづち

N 1	N 2	N 3
引っ張ってほしいかも		
なんか、	✓ (共感) うんうんうんうん	✓ (理解) あー え、でも リィちゃん、十分引っ張れるね

「理解」の「うんうんうん」の場合、前の文脈が「コンビニの予定だったの」という何かの説明で、別に同意共感を表すような話ではない。それに対して「同意共感」の「うんうんうんうん」は前の文脈が「リィちゃん、十分引っ張れるね」という N1 に対する N3 の考えを言い、N2 がそれに同意共感を表していると考えられる。

本稿のあいづちの数え方において、「うんうん」「そうだそうだ」などの反復のあいづちは一回のあいづちとして数え、何回反復したかは表 8 にてまとめた。また、言葉と笑いのあいづちが同時に打たれた場合は言葉のあいづちとして数え、笑いだけのものを笑いのあいづちとして数えた。

4. あいづちの頻度とそのタイミングによる考察

4. 1 あいづちの頻度

あいづちの頻度の考え方としては、水谷信子 (1983) の「時間を単位とした頻度」「音節を単位とした頻度」、黒崎 (1987) の「総発話文数に対するあいづち文の割合」などがある。本稿では異なる言語を比較するため、最も妥当であるのは音声の長さを基準とした比較であると考え^(v)、「拍数を単位とした頻度」を調べた。

日本語はモーラ言語であり、基本的になな 1 文字が 1 拍である。なお、韓国語は音節言語であり、「1 文字 = 1 音節」であるが、1 つの音節が同じ長さで発音されるため、「1 音節 = 1 拍」とも考えられる。たとえば、「여성에게 필요한것, 뭐가있지? (女性に必要なもの、なんだろう)」の場合、韓国語は 12 文字、12 音節、12 拍ということである。

その結果を表 5^(vi)と表 6 にまとめる。

表5 日本人と韓国人のあいづちの頻度の差（個人データ）

日本	総発話拍数	あいづち数	あいづち間拍数	韓国	総発話拍数	あいづち数	あいづち間拍数
N 1	1027	89	11.54	K 1	1610	48	33.54
N 2	749	52	14.40	K 2	1080	47	22.98
N 3	1614	60	26.90	K 3	285	38	7.50
N 4	592	63	9.40	K 4	1338	47	28.47
N 5	1579	38	41.55	K 5	990	12	82.50
N 6	1025	55	18.64	K 6	1061	16	66.31
N 7	1510	45	33.56	K 7	1646	17	96.82
N 8	1057	38	27.82	K 8	430	33	13.03
N 9	756	39	19.38	K 9	968	26	37.23
計	9909	479	20.69	計	9408	284	33.13

データをみると、9人の合計拍数においては日本人が9909拍、韓国人が9408拍でそれほど差はなかったが、あいづちは日本人が479回、韓国人が284回で、日本人の1.6倍であった。

次の表6は表5のデータを1人当たりの平均で表したものである。

表6 日本人と韓国人のあいづちの頻度の差（10分間、一人当たりの平均）

	1人当たりの発話拍数	あいづち数	あいづち間の拍数
日本人	1101	53.2	20.7
韓国人	1045	31.6	33.1

表6のあいづちの数を見ると、日本人は53.2回、韓国人は31.6回で、日本人のほうが21.6回多い。そして、あいづち数を全体拍数と関連付けて、あいづち間の拍数を考えてみると、日本人は20.7拍ごとに1回、韓国人は33.1拍ごとに1回あいづちを打ち、日本人のほうが頻繁にあいづちを打つことが分かる。メイナード（1987）、劉（1987）、姜（2001）⁶⁶などが日本人のあいづちを頻繁に打つ特徴について研究結果を出しているが、今回の調査でもそれを裏付ける結果となった。

「相手がうなずいた場合は別として、黙って聞いていれば、聞き手は必ず不安になる（水谷 2001）」などからわかるように、あいづちは日本人の円滑なコミュニケーションのために欠かせないものであり、小まめにあいづちを打つことはコミュニケーションにおいてプラスの要因となる。

では、韓国人の場合はどうか。韓国人のあいづちを打つ理由とあいづちを打たない理由に関して、生越（1988）は次のようにまとめている。

〈あいづちを打つ理由〉

①あいづちは、相手の話に関心を持っていること、相手の話を聞いていること、ある

いは相手に対する親しみを示すものである。

- ②自分が話している時相手が何の反応も示さないと、自分の話がおもしろくない、あるいは話をきいていないのではないかと不安になる。また、いい気持ちがしない。

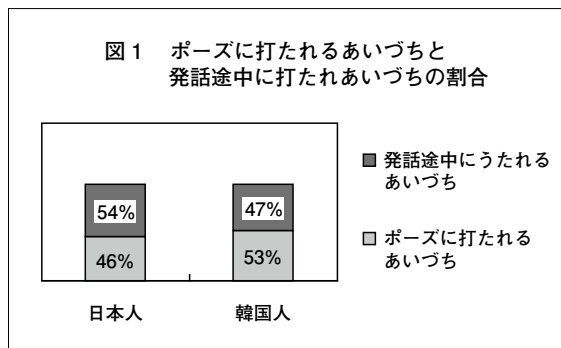
〈あいづちを打たない理由〉

- ③あいづちをいちいち打たれるといい気持ちがしない。
④あいづちを打ちすぎる人は、軽く見え、重みなくなる。
⑤年上（目上）の人の話は黙って聞くのが礼儀である。

生越の分析をも参考にして考えると、まず、あいづちを打つ理由については、日本人のあいづちを打つ理由とよく似ているものであり、韓国人のコミュニケーションにおいても、あいづちは重要な役割を果たしていると考えられる。ただ、あいづちを打たない理由については③の「いちいち打たれる」、④の「打ち過ぎる」などの表現から、過剰なあいづちに関して、いい印象を持っていないということであり、あいづちの果たしている役割自体を否定しているわけではないと考えられる。また、⑤について、生越は「もともと目上の人についての伝統的なものが、今は若者にも浸透しているようである」と言っている。以上の生越の分析は筆者の経験からも同意できる。

4. 2 あいづちのタイミング

あいづちの頻度の高さとともに日本人のあいづちの特徴としてよく言われるのがあいづちのタイミングである。あいづちのタイミングに関しては、杉藤（1993）の「聞き手のあいづちやうなずきは、話者の声下げのイントネーションと関連する傾向がある」や水谷（2001）の「聞き手があいづちを入れるのは話し手のほうに休止つまりポーズがあった時である」などでは、あいづちがポーズの時に打たれると考えられている。一方、氷田良太（2004）は談話におけるあいづち出現位置と出現率の調査を行い、全体の20%前後のあいづちが、ポーズが置かれない場所、つまり、話者の発話途中で打たれていることを明らかにしている。このような発話途中で打たれるあいづちが日本人の特徴であるとしたら、韓国人の場合はどうだろうか。



本稿では、杉藤（1993）を参考にし、日本人と韓国人の話者のポーズの有無によるあいづちの出現率を調査した。

図1を見ると、日本人においては54%、韓国人においては47%のあいづちが発話途中で打たれ、日本人における発話途中で打たれるあいづちの割合が7%高い。ただ、今回

の調査は、3人の間の会話を分析したもので、話者一人に、聞き手が二人になり、3人分を集計したため、杉藤（2004）の20%前後という結果に比べ、相当高い割合を示すこととなった。そして、この結果だけで、両言語のポーズの有無によるあいづちを考えると、7%差があり、両言語に大きな違いがあるとは考えにくい。

あいづちの頻度をも含めて、今回の調査結果を考察すると以下ようになる。

表7 日本人と韓国人のポーズに打たれるあいづちと発話途中に打たれるあいづちの回数

	あいづち数	タイミング	
		ポーズに打たれるあいづち	発話途中に打たれるあいづち
日本人	479回	219回（46%）	260回（54%）
韓国人	285回	152回（53%）	133回（47%）

表7は、図1をあいづちの回数とともに表したものである。この表からみると、ポーズに置かれるあいづちの場合は日本人219回、韓国人152回で、日本人の方が1.4倍多いのに対し、発話途中に打たれるあいづちの場合は日本人260回、韓国人133回で、日本人の方が約2倍多い結果となる。

以上の結果は日本人と韓国人が母語話者同士で会話をを行い、その形態上の特徴を比較する際には類似点として捉えることもできるが、日本人と韓国人がコミュニケーションを行う際には、「日本人のあいづちの頻度の高さ、とくに発話途中に打たれるあいづちの頻度の高さ」のように相違点としても捉えることができる。

5. あいづちの機能

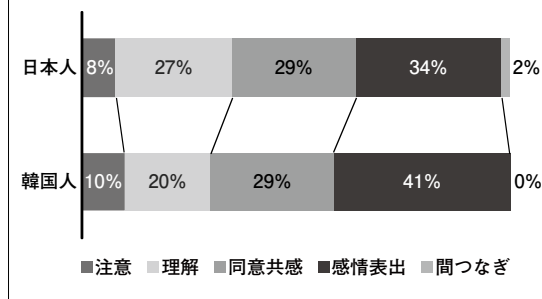
日本人と韓国人のあいづちの機能について、姜（2001）は「聞いている」「理解している」機能は韓国人の方が1.1倍多いのに対し、「同意・共感」は1.3倍、「感情の表出」は1.8倍日本人の方が多い。」という結果を出している。また、その考察としては、楊晶（2001）^㉓を参考にし、「日本人においては「感情表出」機能が多い。日本人は人間関係を大切にし、相手との関係の中で自分を位置付け、相手の立場になって、相手と同じ感情や考えを共有していることを積極的に示そうとする。」と述べている。

本稿は上記のような結果を出した姜（2001）やメイナード（1993）、堀口（1997）、村田（2000）を参考にし、機能による分類を行った。（3頁、機能の分類参照）

大きくは「知らせ」「態度」「間つなぎ」と3つに分類し、細かくは「知らせ」を「注意」「理解」「態度」を「同意・共感」「感情表出」に分け、「間つなぎ」とあわせて5つに分類した。「知らせ」機能は「単に聞いている、理解している」ことを話し手に知らせるある意味では消極的な機能であり、「態度」機能は話し手が言ったことに対して、「聞き手がどう感じたか」を示すより積極的な機能であると考えられる。

図2は上記の基準により、分類を行った結果である。

図2 日本人と韓国人のあいづち機能別分類



まず、5分類においては、「注意」「同意・共感」機能ではほとんど差がなかったのに対し、「理解」機能は日本人27%、韓国人20%で、日本人の方が7%多く、「感情表出」機能は日本人34%、韓国人41%で韓国人の方が7%多い。

また、3分類においては、「知らせ」機能は日本人35%、韓国人30%で、日本人の方が

5%多く、「態度」機能は日本人63%、韓国人70%で、韓国人の方が7%多い。しかし、両言語とも「知らせ」機能よりは「態度」機能が2倍以上高い。

3分類における「知らせ」機能と「態度」機能の差は、5分類における「理解」機能と「感情表出」機能の差であると考えられる。そして、今回の調査では日本人に「感情表出」機能が多いという姜(2001)の研究とは少し違う結果となった。そこで、以下では少し細かく今回の結果を考察していきたい。

5. 1 「知らせ」の「注意」機能

「知らせ」の「注意」機能においては、日本人8%、韓国人10%で、それほど差はなかった。日本人において「知らせ」はあいづちの定義として、もっとも一般的に知られている機能であり、日本人においても、韓国人においても、多くの割合を占めていなかったのは意外である。

例1 「注意」機能のあいづち〈日本人〉

N 1	N 2	N 3
うーん、すし屋の、 あの、若旦那みたいな人が まあ、なんかすし屋やってるから、奥さんが看護婦、 師さん看護婦？看護師さんだけど、	✓(感情)は一	✓(注意) うん ✓(理解) うんうんうんうん ✓(注意) うん

例2 「注意」機能のあいづち〈韓国人〉

K 4	K 5	K 6
✓(注意) 응 (うん) ✓(注意) 응 (うん)	배, 사과, 모과 아니면 유자 뭐이런거 있지 (なし、りんご、カリンの実、ゆずみたいなものを、) 그거랑 생강을 같이 넣고, (それとショウガを一緒に入れて、)	

今回の調査において、「注意」機能は、日本人でも、韓国人でも、話し手が聞き手に対して、何かについての説明を行う際に使われる傾向があり、聞き手は話し手の発話の続きがあることを予想し、その続きを促すことで、聞いているということを話し手に知らせている。このような機能について、堀口（1997）は、「「あなたの話を聞いてますよ」ということを伝えることによって、話し手に話を続けるように促すことができる」と言っている。しかし、このような「注意」機能の占める割合は両言語とも少なく、それは話し手の発話の続きを促し、単なる聞いていることを知らせる消極的なあいづちよりは、「理解」「同意・共感」「感情表出」などのより積極的なあいづちを使用してコミュニケーションに参加しているからだと考えられる。これについてはそれぞれの機能において説明を加える。

5. 2 「知らせ」の「理解」機能

「知らせ」の「理解」機能は日本人27%、韓国人19%である。「注意」機能は日本人と韓国人にそれほどの差がなかったのに対し、「理解」機能は8%の差がある。

「注意」機能のところで、日本人のあいづちの定義としてもっとも知られている「知らせ」の「注意」機能が少ないのは意外であると言ったが、それは「知らせ」の内、「注意」機能よりは「理解」機能のあいづちを多く使うからであると考えられる。日本人の「理解」機能は「注意」機能より3.3倍も多かった。

その理由については、「注意」機能も「理解」機能も「知らせ」の下位分類であるが、「理解」機能の方が「注意」機能より話し手の話に耳を向けているように思わせるということが考えられ、話し手の発話が少し長くなってくると、「注意」機能だけでなく、「理解」機能までも入れて、あいづちを打つ傾向が現れるからである。

例3 「理解」機能のあいづち（日本人）

N1	N2	N3
<div>✓（注意） うん</div> <div>✓（理解） うんうんうん</div>		<div>しかも、1個はなんか工事しはじめて、</div> <div>コンビニの予定だったの</div> <div>すごいわくわくしてたんですよ。</div>

上の例3の場合、「理解」機能は「ここまで理解してます」だけではなく、「ここまでは理解しました。次をどうぞ」のように「注意」の「話の続きを促す」に近い機能を果たしているようにみえる。また、韓国人においても、少ない例ではあるが、同様の例が見られた。

また、その他には、日本人も韓国人も（質問）—（答え）—（「理解」のあいづち）の形態が多く見られた。

例4 「理解」機能のあいづち〈日本人〉

N 7	N 8	N 9
何するんだろう。 ✓ (理解) あー	卒論だ。卒論	あ、じゃ、でも、4年でじゃ、何もないの ✓ (理解) あー

以上のように、両言語において、「理解」機能のあいづちの用いられる形態は類似していると考えられる。

5. 3 「態度」の「同意・共感」機能

「同意・共感」機能は日本人29%、韓国人29%で、両言語とも同じ割合を占めており、用いられる状況もそれほど変わりはない。

また、両言語とも「話し手の発話に対して、同意を示す、共感を示す」という機能の特徴上、「そうそう」「うんうん」「맞어, 맞아 (そうだね、そうだね)」「응, 응 (うん、うん)」など反復で打たれるあいづちが多かった。

例6 「同意共感」機能のあいづち〈日本人〉

N 1	N 2	N 3
✓ (理解) あー あー。	✓ (共感) そうそうそうそう。	お、だって、 あっちも初心だったら、 二人ともだめそうだもんね。

例7 「同意共感」機能のあいづち〈韓国人〉

K 1	K 2	K 3
✓ (理解) 아- (あー)	✓ (共感) 맞아맞어 (そうだねそうだね)	근데멀쩡한애들은, 다여자친구가있거나, 아니면, 성, 외모는괜찮은데, 성격이 이상하거나 (格好良い人は みんな彼女いるし、で、格好良いけど、性格変だし)

表8 日本人と韓国人の「同意・共感」機能あいづちにおけるあいづち反復回数^(ix)

	日本人	韓国人
2 回反復	16回	15回
3 回反復	6 回	10回
4 回反復	11回	5 回
5 回反復	1 回	0 回

「同意・共感」機能あいづちの内、反復形の割合は日本人25%、韓国人37%であった。日本人の反復形のほとんどは「うん」「そう」の反復であり、韓国人の反復形は「맞어 (そう

だね)」「어 (そう)」「그렇지 (でしょう)」「응 (うん)」などの反復であった。聞き手は、このように反復して「同意・共感」のあいづちを打つことで、共感度を強く示している。

表8は日本人と韓国人のあいづちの反復回数を表した表である。日本人にも韓国人にも2回反復が一番多く、その次に日本人は4回反復、韓国人は3回反復が多かった。

日本人において、3回の反復が少なく、2回、4回と偶数回であいづちを打つのは日本語のリズムと関係があると考えられる。斎藤純男(1997)は「共通日本語は(中略)モーラがその単位となっているモーラリズムといえるものである。また、日本語では、2モーラないし4モーラがひとまとまりとなってリズムを作り出すことがあると指摘されている」^(x)と述べている。

5. 4 「態度」機能の「感情表出」機能

「感情表出」機能においては、日本人34%、韓国人41%で、韓国人の方が7%多いが、両言語とも、この「感情表出」機能があいづちのもっとも大きい割合を占めていた。また、これは姜(2001)の研究とは少し違う結果である⁽ⁱⁱ⁾。今回の調査では、(笑い)もあいづちとして認めており、それがこのような結果につながったと考えられる。

まずは(笑い)について考えてみる。

例8 「感情表出」機能のあいづち〈日本人〉

N 4	N 5	N 6
ブログとか読んでるもん	すごいファンだね。	✓ (感情) あ、本当に？ えーじゃ、私も読もう。
✓ (感情) (笑い)	✓ (感情) (笑い)	

例9 「感情表出」機能のあいづち〈韓国人〉

K 1	K 2	K 3
아- 벌써? (あー もう?)	그래도 유림이 그새 다 파악해 왔던데 (でも、ユリムもう把握してきたよ)	
✓ (感情) (웃음) (笑い)	잘생긴애 (格好良い男の子)	✓ (感情) (웃음) (笑い)

上の例をみると、(笑い)は「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現で、実質的な内容を含まない表現」という本研究の定義を充足させている。

「へえー」「マジで？」などの言葉で表れるような「感情表出」のあいづちは話し手が言ったことに対して、聞き手がどのように感じたかを示すものであるが、(笑い)はそれに加えて、さらに、この話に興味がある、今このような話が楽しいという感情までを含めて示しているようにみえる。そして、結果的に話の雰囲気やにぎやかにさせ、そのコミュニケーションをより積極的なものとさせる機能も持っていると考えられる。(笑い)は日本人でも、韓国人

でも感情表出の62%という大きい割合を占めていた。

また、このような（笑い）を含む「感情表出」機能のあいづちが、日本人においても、韓国人においても、もっとも大きい割合を示していることから、姜（2001）の「人間関係を大切にし、相手との関係の中で自分を位置付け、相手の立場になって、相手と同じ感情や考えを共有していることを積極的に示そうとする」という日本人の特徴が日本人だけではなく、韓国人にも表れていると考えられる。

5. 5 「間つなぎ」機能

間つなぎ機能は日本人においては2%、韓国人においては今回0%であった。

日本人は会話が断絶された時に、断絶される前の話題のポイントとなる言葉を「繰り返す」ことからまた話を始めていたが、韓国人の場合は会話の断絶があまりなかったこともありⁱⁱⁱ、また、断絶してしまった場合も、前の話題を繰り返すことなく、「注意喚起」をさせることによって、また新しい話題で話を始める傾向があった。これが韓国人に「間つなぎ」機能のあいづちがなかった理由として考えられる。

5. 6 結果

あいづちの頻度とタイミングでは、「日本人の方があいづちの頻度が高く、発話途中に打たれるあいづちの割合が多い」という差が確認できた。しかし、機能的な面においては類似しており、両言語とも「注意」「理解」の「知らせ」機能よりは「同意共感」「感情表出」の「態度」機能のあいづちが多く使われ、コミュニケーションをより積極的なものにしようとする努力が行われていた。また、それぞれの機能における使い方も類似していた。

6. まとめ

本稿では、日本人と韓国人のコミュニケーションにおけるあいづちの実態を調査し、頻度、タイミング、機能の分析を行い、以下のような結果が得られた。

- ①（あいづちの頻度について）拍数を単位としたあいづちの頻度は、韓国人より日本人の方が高かった。
- ②（あいづちのタイミングについて）発話途中に打たれるあいづちは韓国人より日本人の方に多かった。
- ③（大きいカテゴリーからみたあいづちの機能について）日本人、韓国人とも「知らせ」機能のあいづちより「態度」機能のあいづちが多かった。
- ④（細かいカテゴリーからみたあいづちの機能について）
 - ・「注意」機能においては、日本人8%、韓国人10%で、同程度の割合を占めており、使い方も類似していた。
 - ・「理解」機能においては、日本人27%、韓国人20%で、日本人の方に7%多かった。しかし、使い方は類似していた。

- ・「同意・共感」機能においては、日本人29%、韓国人29%で、同じ割合を占めており、使い方も類似していた。また、反復のあいづちが多く使われ、反復回数は日本人の方に若干多かった。
- ・「感情表出」機能においては、日本人34%、韓国人41%で、韓国人の方に7%多かった。しかし、使い方は類似していた。また、両言語ともに（笑い）の「感情表出」のあいづちが多く使われていた。
- ・「間つなぎ」機能においては、日本人2%、韓国人0%であった。会話が断絶された時に日本人は直前の話題のポイントとなる言葉を繰り返すことで、韓国人は注意喚起の話で話を始める傾向があった。

以上の結果、日本人と韓国人のあいづちは頻度とタイミングにおいては大きい差があるが、機能的な面での働きにおいては類似していることが分かった。したがって、筆者が抱えていた日本人とのコミュニケーションにおける問題は、あいづちを増やすことと、相手の発話に重なるあいづちを打つことで、ある程度解決できるのではないかと考えられる。

今回の調査は日本人同士と韓国人同士の会話を収録し、各言語におけるあいづちの実態を調べたもので、日本人と韓国人の間の異文化コミュニケーションにおけるあいづちの実態については考察することができなかった。このテーマについては今後の課題にしたい。

注

- (i) 「「あなたの話を聞いてますよ」ということを伝えることによって、話し手に話を続けるように促すことができる」(堀口 1997)
- (ii) あいづち研究は二人会話を対象とした研究が一般的であるが、今回はカメラを前にして2人より3人の方がより自然な会話ができると考え、3人で会話をしてもらった。
- (iii) 日本、韓国とも男性より女性の方があいづちの頻度が高い(姜2001)
- (iv) あいづちとして用いられるうなずきの場合、話の流れや状況により、機能による分類の確定が難しいものが多く、両言語においてその意味するものが共通していると認定するには無理がある。しかし、（笑い）の場合、（笑い）の性格がどうであれ（嬉しさの笑い、おかしさの笑い、照れ隠しの笑いなど）、話し手に対する聞き手の感情表出であることは確かであり、両言語において共通していると思われる。そして、（笑い）は本研究の「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現で実質的な内容を含まない表現」という定義を充足させている。
- また、（笑い）は日本人でも、韓国人でも、同割合を占めており、（笑い）をあいづちとして捉えることが、両言語のあいづちの相違点と類似点を比較する際、その結果に影響を与えることはないと思われる。
- (v) 音節や文字数を基準とした場合、分母が少なくなることにより、両言語のあいづち間の音節数の差は広がる。
- (vi) 今回の調査したデータからみるには、談話の中聞き手役を演じる人がいるようである。それぞれ、N2、N4、N9、K3、K8が聞き手役であると考えられる。この聞き手役を演じる人の拍数、あいづち数、あいづち間拍数の平均を見ると、日本の場合、699拍、51.3回、13.6回、韓国の場合、357.5拍、35.5回、10.1回で、全体の平均より発話拍数は少なく、あいづちはそれほど変わりが無い。しかし、本調査は使用データが少なく、更に調査が必要である。
- (vii) 日本人はアメリカ人よりあいづちが2倍多い(メイナード 1987)
日本人は中国人よりもあいづちを頻繁に打つ(劉 1987)
日本人の方が韓国人よりあいづちの頻度が高い(姜 2001)

- (viii) 会話をする際、自分を相手に同調させ、相手になることが大切であるから、会話者が共感的な場を基本として常に相手の気持ちを確かめ合いながら話しを進めようとする（楊晶 2001）
- (ix) 一回で打たれた「同意・共感」のあいづちは対象外とした。
- (x) 斎藤純男（1997.11）『日本語音声学入門【改訂版】』第6章 リズム 株式会社三省堂
- (xi) 姜（2001）の研究では「注意」機能と「理解」機能を「注意理解」と一緒にし、その頻度は両言語において「注意、理解」>「同意共感」>「感情表出」の順であった。
- (xii) 渡辺（1985）は、韓国人の会話における特徴を、「韓国人は何よりも活発な「相互作用」を良しとする。相手に言葉で積極的に働きかけ、また、にぎやかに会話をもどす運動をお互いたえずに行うことを良しとする」点だといっている。

参考文献

- (1) 水田良太（2004.1）「会話におけるあいづちの機能—発話途中に打たれるあいづちに注目して—」『日本語教育』120号 53-62頁
- (2) 大浜るい子（2006.9）『日本語会話におけるターンの交替と相づちに関する研究』株式会社 溪水社
- (3) 姜 昌妊（2001）「日韓男女のあいづちの対照研究」『武庫側女子大学言語文化研究所年報』第13号 45-60頁
- (4) 生越直樹（1988）「朝鮮語のあいづち—韓国人学生のレポートより」『日本語学』第7巻 13号 明治書院 12-17頁
- (5) 黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150 109-122頁
- (6) 杉藤美代子（1993）「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』Vol.12 No.4 11-20頁
- (7) 水谷信子（1983.9）「あいづち応答」水谷修編『話ことばの表現』筑摩書房
- (8) 水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』第7巻13号 4-11頁
- (9) 水谷信子（2001）「あいづちとポーズの心理学」『言語』Vol.30 No.4 46-51頁
- (10) 村田晶子（2006.6）「学習者のあいづちの機能分析—「聞いている」という信号、感情・態度の表示、そして turn-taking に至るまで」『世界の日本語教育』241-260頁
- (11) メイナード、泉子（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』Vol.16 No.11 88-92頁
- (12) 堀口純子（1997.9）『日本語教育と会話分析』くろおし出版
- (13) 堀口純子（1998）「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻 第10号 31-41頁
- (14) 堀口純子（1998）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号 13-26頁
- (15) 楊 晶（2001）「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて—機能に着目した日本人との比較—」『日本語教育』第111号 46-55頁
- (16) 渡辺吉金容（1985）「会話分析に見る日—韓コミュニケーションギャップ」『慶應義塾大学日吉起要（言語・文化コミュニケーション）1』132-149頁

